

## 林甸のナベヅル

岷江冷杉先生

2006年10月6日、中秋節、初日に我々一行は林甸県の旅館にいた。郭玉民博士は皆この人たちと同郷人のようで、朝早く起きて直接すぐにツルを見に出掛けた。ツルがいるのは林甸の街からさらに離れた場所なので、旅館の女性から、食事に便利な別の場所を世話をしてくれた。

ツルの多くは早起きで、林甸ツルも毎日早朝4時半に起きてねぐらを飛び立ち、採食地へ向う、したがって、早朝3時半、まだ明けぬ暗がりの中を我々は準備をして出発した。わたしとおとなしいコウノトリが乗った自動車は、真っ暗な天と地の間をしばらく走った……。

車は曲がりくねった道を走り、巨浪牧場へ、道の前方のいくつかの柳の梢の上に大きな中秋の月が低く浮かぶように現れ、黄色く透明な月の色が人を拒む様な蒼白く冷え冷えとした色に見えた。

目的地に着いた。夜明け前、まだ朦朧としている皆がそれぞれの場所で休み始めたが、わたしはナベヅルのねぐらへ車を走らせ、夜明けを待って彼らが採食地へ出掛ける数を数えることにした。

我々の車は農道のでこぼこ道で止まり、片方がナベヅルのねぐらで、他方が昼間の採食地だ。ナベヅルのねぐらがある場所で昨日、私たちはノガンを追跡して実際に観察した。一つの大きな沼があり、岸辺にいくえにもヨシが重なって生えており、私たちはそこえ潜り込み水の中を進んだ。これらのヨシ原はナベヅルの最も安全なねぐらになる。夜が次第に明け始め東の空に少しづつ太陽が昇り始め、空がまったく明るくなった。5時半、4羽のナベヅルが西へ向って飛び去った。さらに、6時半まで待ったら出掛けよう！。しかし、ナベヅルは相変わらず“ようとして現れず”彼らは昨晚この大きな沼でねぐらをとったはずだが、ある人は最近彼らナベヅルは林甸では見られないといい、もとは居たかも知れないがもう来なくなってしまったと……ほんとうに待ちぼうけをくい、我々はナベヅルの採食地へ向った。見つけた“兵士のように塚に隠れて”彼らナベヅルを見ることができた、ツルはすでに採食地に来ており、彼らには新しいねぐらができたのであろう。

彼らは鳥を撮影する場所を作り、態勢にはいった。草原のほとんど全てが変転し、この草原の面積も鳥たちにとって大きなものではないが、生息地として多様性に富んでいる。農地も有り、トウモロコシ、緑豆、高粱、ヒマワリ等が作付けされており、牧草地はすでに収穫されている。人が植林した場所は灌木林も、浅い水溜まりもある。我々は三、四百羽のナベヅルを見つけた。他に十数種の鳥も見られた。ナベヅルを除くとカラス、カササギが多く、2、3羽づつ草原のそこそこで、我々に向って絶えず鳴き声をあげ、歓迎しているのか追い出そうとしているのかわからない。彼らは時々結束して一羽のチョウゲンボウあるいはハイタカに攻撃を加え、時には単独でいるカラスやカササギが攻撃するが勝負はつかない。もちろん何時までも追わず、戯れは早々に終わり、慌ただしく幕を閉じる。

この一日の中で我々は4羽のアカアシチョウゲンボウ *Falco vespertinus* (彼らは同時に我々の視野の中に現れた) と、1羽のコチョウゲンボウ *F. columbarius*、3羽のチョウゲンボウ *F. naumanni* を見た。1羽のチョウゲンボウは我々の目の前を脚にぶらさげた“戦利品”を見せびらかすように飛び去った。この地域は彼らが南下するときの中継地で、またここで夏を過ごすこともあり、今すぐに南下することはない。

我々は他に3種のチュウヒ *Circus spilonotus*、ハイイロチュウヒ *C. cyaneus*、マダラチュウヒ *C. melanoleucos* を見た。なかでもハイイロチュウヒはよく見かけるが、チュウヒを見るのは少ない。マダラチュウヒの雌はチュウヒとよく似ているが、体型がやや小型である。マダラチュウヒはカササギのように白黒の体色だが大型で、カササギのように休みなく騒ぎ立てず、沈黙して語らない。秋空の爽快な草原に、マダラチュウヒも軽やかに、翼を繻子の扇のように羽ばたき、草原をひょうようと蝶が舞うように飛ぶ。“蝶の飛ぶ”飛び方をカササギといえど真似ることはできないだろう、カササギはぱたぱたと忙しく鳴きながら飛び、何時も鳴きながら黙っているときがない。かつて一羽のオオカラモズの留まっている小枝の上空をマダラチュウヒが飛びすぎ、半日程も黙って小枝に留まっていたオオカラモズは一声大きく鳴いてマダラチュウヒに向って飛び出したが、マダラチュウヒは意にかけず、そのまま飛び去った。オオカラモズはちよいと追いかけたが引き返し、初戦で勝ったと傲慢に胸を張り、もとの枯れ草の枝に戻るのを見た。

この1日で我々は両親と子どもの3羽とつがいだけの家族のタンチョウ2家族を見た。他に僅かなアオサギの群れも……

草原にはヒバリ、コウテンシ、シロハラホオジロ、ハクセキレイなどがおり、彼らも一団となって南へ渡るスズ

メ目の鳥でもうすぐ旅につく。道はまだ遠い。

天高く淡い雲の秋空の上空を常に翼を広げて飛ぶノスリをよく見かける。夕方我々は林の中のヤナギの枝に一羽のノスリが留まっているのを見つけた。私には遠目にかかわらずなぜか知らぬがノスリはある種少女のような可愛い顔つきに見えた、しかし、彼の飛翔には青空に現れたたくましく颯爽とした猛禽の心意気を感じる……

視野の広い草原の湿地に、チュウヒは出沒し、そこではコミミズクも見ることができる。今年の春節に私は英文版《フクロウ類の観察ガイドブック》を見たが、これは北アメリカのフクロウ類であって、これはあまり私には意味がなかった、しかし、私は一口でいえばこのことで気が楽になり目が覚めた。私は盤金湿地においてしばしば見たコミミズクの一家を思い出した、実は5月頃、以前にも林の中で飛ぶ姿を見たが、その時まさに彼らは抱卵中だった。林甸のコミミズクについてはあまり印象が無かったが、幸いなことに私の日記には記録が残っていた。“乱筆だがよく覚えている”これで再び証明されたということだ。当時私はなぜコミミズクに出会いながらよく注意しなかったのだろうか？ このことは私を目覚めさせ、少しも怠りなく、休み無く自分の知識の蓄えに備えることを望み、これにより人はみなすべての物事を熟知するようになる、

——これは知識の蓄えに深刻な印象を与えた。当時私はコミミズクを知らなかった、幸いにも私は現在彼をなおざりにできなくなった——彼らもまたチュウヒたちと“湿地の覇者”という英名を共有している。